

最上川フットパス整備の取り組み

国土交通省 東北地方整備局 山形河川国道事務所 副所長 加藤 信行

1. はじめに

日本三大急流の一つである最上川は、米沢市西吾妻山を水源とし山形県内だけを流れ、日本海（酒田市）に至る流路延長229kmの大河川です。流域面積は県土の約80%と大部分を占め、県民にとって古くから深く関わりがあり「母なる川」と称され愛されています。

江戸時代には、山形城主最上義光らによって上流から河口まで航路が開かれると、主要な輸送路となり「最上川舟歌」に代表されるように舟運文化が栄えた地域です。

沿川には、当時、主要物資であった紅花に加え、サクランボ、そば、ラ・フランスなどの生産地、舟運時代の難所（瀬）、山寺などの歴史文化、急流河川が造り出した景勝地など観光資源が豊富な場所が数多くあります。

そこで、当事務所では最上川沿川における各種の観光資源と、河岸とを自らの足で、自然が満喫でき、新たな発見のできる「歩き」を基本にしたフットパス*で結び、観光交流人口の増加による地域の活性化、河川の利用促進を目的に地域と協働で「最上川フットパス*事業」としてH16年度より実施しています。

*フットパス：「歩くことを楽しむための道」のことをいい、英国において同種の小みちが「foot-path」と呼ばれていることから用いた

2. 最上川フットパス

1) コンセプト

美しい自然を持つ最上川とその周辺の自然や地域の歴史・文化等の観光資源を「フットパス」で結び、自然に親しみながら多様な体験ができ、歩く楽しみのある空間を整備しています。特に水辺に近づけるような工夫をして、多様な自然と触れ合い、最上川をまるごと楽しんでもらえる川づくりを目指しています。

コンセプトは、

“まるごと体感 最上川”

2) 整備状況

地元の熱意、熟度が最も高かった長井地区を先駆けて整備し、現在、4地区において供用しています。各地区では観光資源を活かしたルート設定がなされており、ガイドマップ片手に楽しむことができます。

今年度は、最上川三難所*などの美しい川の景観、舟運で栄えた文化・歴史などがあり、川との関わりが深い村山市において整備を進めている状況です。

*三難所：舟運時代の難所で「隼・三ヶ瀬・基点」を指す。現在は、舟下りの観光名所となっている。

フットパス整備状況（H18.7月現在）



3) 整備内容

ルートについては、既存の観光資源・散策路、将来の観光計画等について整理し川岸と結ぶルートで検討しています。地域の皆さんと実際に歩いて隠れた観光名所等、新たな発見もありました。構造については、自然との調和をコンセプトに、極力費用をかけずに自然を活かしたものと現地状況を確認して決定しています。

【ルート】



【構造】

- ・主体となる「敷き砂利」の整備



※ 景観確保のため、周辺の伐木をウツチップ®化し利用

- ・湿地部は「木道」で整備



- ・水たまり部は「木橋」で横断



- ・小河川部は「飛び石」で横断



3. 整備にあたって

1) 最上川上流フットパス検討会

フットパスは、地域の皆さんの知恵によって、利活用していただき、日常的な管理をして頂くことを基本にしています。そのため、地域の皆さんが主体となって構成される検討会を設置し整備に反映しています。

また、検討会の下部組織として、各地区毎に分科会を設置しきめ細やかな検討内容となるように配慮しました。

【検討体制】



【検討項目】

- ① 候補地、ルートの検討
- ② 整備内容・構造の検討
- ③ 整備にあたっての課題と対処方法（用地等）
- ④ 維持管理方法の検討
- ⑤ 利用促進方法等の検討



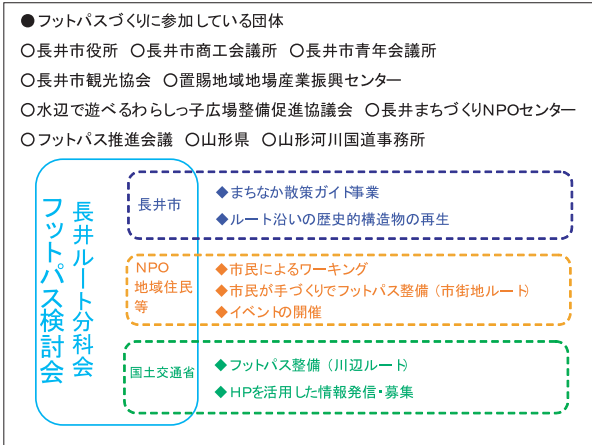
基本的には…

- ・国土交通省による川岸沿いの小みち整備
- ・自治体の協力による休憩施設や案内板等の整備
- ・土地所有者の協力による私有地の通行許可（用地買収しない）
- ・市民団体や商工会等の協力による清掃等の維持管理

4. 長井地区にみる取り組み

長井市では、フットパスづくりにより下図に示す地域の皆さんが参加しており、整備内容について検討してまいりました。特に若い方の地元に対する熱意が高く、計画段階から自ら積極的に参加して頂いており、草刈り・清掃等の日常管理につきましてもご協力が得られています。

また、整備後の利活用については、各種イベントで活用するなど積極的な取り組みがなされています。



【計画段階からの参加】



◆案内板のデザインを検討



◆NPOによるガイドマップの制作

【愛護活動への積極的な取り組み】

◆NPOや推進会議のメンバーが中心になって、



イベントの企画・運営や案内ガイドを実施



◆周辺住民による清掃・美化活動の実施



ひと休み
するベン
チにも粋
なはから
い

◆休み処のデザインを検討



◆民地の一部をルートとして整備

【多目的な利用に活用】

完成したフットパスを利用して、長井市・NPO・山形新聞社等によって多目的に活用がなされています。

健康

・「全国白つつじマラソン」でウォーキング部門を新設。

・「運動解消教室」でのコースに取り込み

観光

・「長井ランタンマーケット」、「雪灯り回廊まつり」のコースとして

・コース沿いに桜の植樹

学習

・「最上川200kmを歩く」で川沿いのゴミを拾いながら小学生が堤防護岸、舟運文化を学習

・豊田小学校の全校遠足で川沿いのフットパスを歩きながら水辺環境を学習

環境

・「ゴミショイウォークラリー」ではコースを歩きながらゴミ拾いを実施



全国白つつじマラソン
(新設フットパスコース)



河口までリレーウォーク
(地元新聞社主催)

5. 全国初！フットパスシンポの開催

全国各地でフットパスなどのリバーツーリズムを、新たな観光資源として活用し、地域活性化に取り組んでいる、NPO・市民団体・行政機関の関係者が一堂に集まり、その先進的な取り組み事例や活用、まちづくりについてなどの情報の交換と発信を目的に去る6月17-18日に山形県長井市で開催されました。



全国に配布された広報
チラシ




リレー発表後の意見交換

6月17日
<シンポジウム>

●基本講演「フットパスの楽しみ方」講師：白井貴子氏
●情報提供
①最上川フットパスながいの紹介
長井フットパス推進会議 会長 菅野昭浩氏
②観光地域づくりの あ・し・た
国土交通省総合政策局 事業総括調整官室 企画官 野田勝氏
●リレー発表
「協働」
①「創って、伝える」面白白川・思い出コース」
(水辺で遊べるわらしこ広場整備促進協議会)
②「日本フットパス協会設立に向けて」
(多摩丘陵フットパス NPOみどりのゆび)
「連携」
③「最上川流域観光交流空間づくりの推進」
(最上川リバーツーリズムネットワーク)
④「北海道におけるフットパス形成の特徴」
(全道フットパス・エコネットワーク)
「観光」
⑤「木曾川夢空間づくり」
(日本ライン広域観光推進協議会)
⑥「桜回廊と最上川河川敷を歩く観光旅行商品」
(東日本旅客鉄道仙台支社)

【コーディネーター】・日本福祉大学 助教授 中村友彦氏
【アドバイザー】・せんだい・みやぎNPOセンター 事務局次長 遠藤智栄氏
・国土交通省総合政策局事業総括調整官室 企画官 野田勝氏

シンポには
約300名参加



6月18日
<エクスカージョン>

Aコース：「最上川フットパスながい散策コース」
Bコース：「最上川カヌー下り体験とフットパスコース」
Cコース：「熊野山山頂、長井カヌーと東洋の砂防アイコース」
Dコース：「最上川フットパスさがえ散策と花咲フェアコース」
Eコース：「山寺散策とカヌー狩りコース」

5コース
約120名参加

6. おわりに

今回は、地域の皆さんの熱意が最も高く最初に整備となった「フットパスながい」の事例を中心に紹介しました。後に整備している地区についても、計画段階から地域の皆さんの声を取り入れ、ルート全体の共通項目となる案内板・サインやガイドマップについては、皆さん自らのアイディアでデザインして頂いています。

今後は、整備されたフットパスをどのように有効に活用していくかが課題になります。各地区における課題の検討にあたっては、地区毎に組織している利用促進協議会等により行うこととなります。また、最上川上流フットパス検討会においては、流域全体(各地区との連携、情報の発信等)について今後検討することを予定しています。

母なる川を中心に、地域の皆さん自らの足で歩き始めたところです。